

研究業績等に関する事項

著書, 学術論文等の名称	単著, 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所, 発表雑誌等 又は 発表学会等の名称	概 要
<p>(著書(和文))</p> <p>1. 『検証・若者の変貌 —失われた十年の後に』</p> <p>2. 『シードブック 子 育て支援演習』</p>	<p>共著</p> <p>共著</p>	<p>2006年2月15日</p> <p>2021年8月10日</p>	<p>勁草書房</p> <p>建帛社</p>	<p>メディアと青年がどのように語られてきたのか、新聞言説・先行研究などをまとめ、東京と神戸で青少年を対象に行った青少年研究会の調査票調査による数量データなどをもとに、各メディアの利用状況などについて、分析を進めた。担当：第3章「メディアと若者の今日的つきあい方」(75-112頁)(38頁)、編著者：浅野智彦、共著者：南田勝也、福重清、<u>二方龍紀</u>、岩田考、浜島幸司</p> <p>現代の子育て家庭の生活について、生活時間などに関する調査データをもとに整理し、その課題について論じた。読者となる学生が実践的に学べるように、保育所・幼稚園で出会う子どもたちの様子から、その家庭の問題にどう気付き、支援するのかなどについても論じた。担当：第2章「現代の家庭・子育ての状況と求められる支援」(16-25頁)(10頁)、編著者：太田光洋、共著者：江村綾野、岡田健一、小山頭、高下梓、寺井知香、中山智哉、姫田知子、平沢一郎、<u>二方龍紀</u></p>
<p>(学術論文(和文))</p> <p>1. 感情管理と社会の関わりについて—共生社会の困難性と可能性 (修士論文)</p> <p>2. 携帯電話の電話帳機能と人間関係の関連—都市に住む若者の調査を中心に—</p>	<p>単著</p> <p>単著</p>	<p>2002年3月</p> <p>2006年3月</p>	<p>武蔵大学大学院人文科学研究科社会学専攻</p> <p>『上智大学社会学論集』30号</p>	<p>ホックシールドなどの議論をもとに、「感情管理」と社会の関わりについての先行研究をまとめ、大学生を対象に、感情管理についての調査票調査を行い、その数量データを分析した。調査については、ボランティアやアルバイト等の大学時代の経験と感情管理に対する認識の関係などを中心に分析を進めた。(査読有り)</p> <p>東京と神戸で青少年を対象に行った青少年研究会の調査票調査およびインタビュー調査などをもとに、携帯電話の利用について分析を進め、整理した。特に若者の携帯電話の電話帳の登録・削除の過程には、「儀礼」として番号を登録し、「関係整理」のために番号削除をする傾向が見られることが分かった。(119-137頁)(19頁)</p>

<p>3. 中高年における情報化とライフスタイル—都市における中高年調査からの考察—</p>	<p>单著</p>	<p>2007年3月</p>	<p>『上智大学社会学論集』31号</p>	<p>東京で中高年を対象に行った武蔵大学ライフスタイル研究会の調査票調査などをもとに、中高年のライフスタイルと情報化の関わりについて数量データの分析を進め整理した。中高年の中にも、情報化への対応をめぐって、顕著な差があり、情報化に積極的な中高年のライフスタイルには、「未来重視志向」などの特徴があることが分かった。(100-118頁)(19頁)</p>
<p>4. 『生活・情報・福祉—中高年における情報化の課題と展望—』</p>	<p>单著</p>	<p>2008年3月</p>	<p>『上智大学社会学論集』32号</p>	<p>「生活の情報化」や「中高年の情報化」が実際にどのように進んでいるのか、という問題について議論を整理し、そこにある課題について論じた。具体的には、福祉領域で進む情報化の議論などを見ていった。その中で、「情報コミュニティ」と言える協力の形が重要になってくることが明らかになった。(89-109頁)(21頁)</p>
<p>(紀要論文)</p> <p>1. 子育て家庭の生活と支援—生活時間調査からの考察—</p>	<p>单著</p>	<p>2014年3月</p>	<p>『清泉女学院短期大学研究紀要』32号</p>	<p>調査票調査の分析に基づき、「子育て家庭」の生活時間の状況について整理し、その支援の課題について論じた。分析の結果、子育て家庭の女性の家事・育児時間や男性の仕事時間が、顕著に長いことが確認できた。また、末子年齢別の分析では、家事・育児時間は、「0歳」や「1～3歳未満」の子どもがいる家庭で特に長い、「3歳以上」になると減少することが分かった。時間意識に関する質問では、「子育て家庭」では、忙しいと答える割合が高かった。「仕事と家庭生活の両立」に関しては、「子育て家庭」で困難であるという意識の割合が高く、特に女性において高かった。こうした子育て家庭の生活時間の特徴に対応した支援やサポートが必要であることが確認できた。(11-21頁)(11頁)(査読有り)</p>
<p>2. 子育て家庭の生活時間—平日と休日の比較を通して—</p>	<p>单著</p>	<p>2015年3月</p>	<p>『清泉女学院短期大学研究紀要』33号</p>	<p>「子育て家庭」の生活時間の状況について、調査票調査の分析に基づき、平日と休日の生活時間の比較を行い、整理した。分析の結果、子育て家庭の女性では、平日・休日ともに、「家事・育児時間」が長時間に及び、家事・育児時間以外が変動する割合が、比較的少なくなっていることが分かった。一方、子育て家庭の男性では、平日の仕事時間が長く、仕事時間以外の生活時間が、比較的短くなっているが、休日は、「家事・育児時間」や「趣味時間」が確保されていることが分かった。(19-31頁)(13頁)(査読有り)</p>

3. 子育て家庭の意識と行動—中年調査からの考察—	単著	2016年3月	『清泉女学院短期大学研究紀要』34号	調査票調査に基づき、「子育て家庭」の「生活意識」「家族意識」「消費生活行動」「家族行動」「生活全般の傾向」について分析し、整理した。分析の結果、「子育て家庭」では、「非子育て家庭」に比べて、「生活の安定志向」が高いが、「生活への満足」を感じられない家庭も見られることが分かった。また、両親に対し、経済的援助をする家庭も比較的少ない傾向が見られることが分かった。「暮らしの余裕」についても、「苦しい」とする家庭が、「非子育て家庭」に比べ、多い傾向が見られた。(43-52頁)(10頁)(査読有り)
4. 子育て家庭における生活意識・行動の差異—世帯収入・末子年齢別による分析—	単著	2017年3月	『清泉女学院短期大学研究紀要』35号	「子育て家庭」内の差異について、調査票調査に基づき、「世帯収入」「末子年齢」の視点から分析し、整理した。分析の結果、経済的に豊かな子育て家庭は、そうではない子育て家庭に比べて、「生活に満足している」とする割合が高く、「定住志向」「将来は明るい」とする回答も多い傾向が見られた。また、末子年齢が「未就学」の家族よりも、「中高生」の家族の方が、「暮らしの余裕」について「苦しい」とする家庭が、多い傾向が見られた。(50-59頁)(10頁)(査読有り)
5. 子育て家庭の生活と身近な人間関係—家族・友人関係による分析—	単著	2018年3月	『清泉女学院短期大学研究紀要』36号	「子育て家庭」の意識や行動について、調査票調査に基づき、家族や友人関係との関わりを分析し、整理した。分析の結果、親世帯と同居している回答者よりも、同居していない回答者の方が、生活に満足している割合が高く、「暮らし向き」についても、「余裕がある」とする割合が高いことが分かった。また、「悩みを相談できる友人がいる」回答者の方が、「悩みを相談できる友人がいない」回答者よりも、「家庭生活を重視する」という割合や「福祉社会志向」の割合が高いことも明らかになった。(43-54頁)(12頁)(査読有り)
6. 子育て家庭のライフスタイル—情報行動・社会意識の分析から—	単著	2019年3月	『清泉女学院短期大学研究紀要』37号	「子育て家庭」のライフスタイルについて、調査票調査に基づき、情報行動や社会意識の側面から分析し、整理した。分析の結果、「子育て家庭」では、携帯電話によるインターネット利用の割合が、他の家庭種別に比べて少なく、逆に、固定電話の利用の割合が多いという傾向が見られた。インターネットでの政治的・社会的意見表明についても、消極的な傾向が見られた。社会意識に関しては、選挙での投票による政治参加に関して積極的で、また、「ボランティアに参加すべき」とする割合が高いことが確認できた。(31-41頁)(11頁)(査読有り)

7. 子育て家庭の生活意識—世代・働き方による比較—	単著	2020年3月	『清泉女学院短期大学研究紀要』38号	「子育て家庭」内の生活意識や行動の差異について、調査票調査に基づき、世代や働き方の側面から分析し、整理した。分析の結果、世代に関しては、30代の方が40代よりも、「趣味・家庭重視志向」が見られ、また、「将来は明るい」とする回答が多い傾向が見られた。また、「共働きかどうか」という分析からは、「共働き」の方が「定住志向」の割合が多いという傾向が見られた。(64-72頁)(9頁)(査読有り)
8. 子育て家庭の生活意識・社会意識—暮らし向きからの分析—	単著	2021年3月	『清泉女学院短期大学研究紀要』39号	「子育て家庭」内の生活意識・社会意識の差異について、調査票調査に基づき、「暮らし向き」の側面から分析を行った。「暮らし向きが苦しい子育て家庭」の方が、それ以外の子育て家庭よりも、「生活に満足していない」「自分の将来は明るいと思わない」との回答が多いという傾向が見られた。また、「暮らし向きが苦しい子育て家庭」の方が、それ以外の子育て家庭よりも、「社会は平等ではない」との回答が多いという傾向が見られた。(21-30頁)(10頁)(査読有り)
9. 子育て家庭の生活に対する満足感—家族関係・身近な人間関係からの分析—	単著	2022年3月	『清泉女学院短期大学研究紀要』40号	「子育て家庭」の生活に対する満足感に関わる要因について、調査票調査に基づき、諸属性や家族関係・身近な人間関係等の側面から分析を行った。経済的要因が生活満足感に与える影響が大きいことが確認できた(子育て家庭の男性に関しては、特に、その傾向が顕著だった)。また、相談相手がいることや子育てに関係する人間関係があることが、生活満足感に対して、正の効果があることが確認できた。(41-50頁)(10頁)(査読有り)
10. 子育て家庭の生活満足感—生活の中の充実感からの分析—	単著	2023年3月	『清泉女学院短期大学研究紀要』41号	「子育て家庭」の生活に対する満足感に関わる要因について、調査票調査に基づき、諸属性や生活の中での充実感等の側面から分析を行った。子育て家庭の回答者の生活満足感については、「家族と過ごしている時に充実していると感じる」ことや「仕事の時に充実していると感じる」ことが正の効果があることが分かった。また、「家族と過ごしているときに充実していると感じる」回答者には、「家庭生活重視志向」や「地域定住志向」の傾向が見られることが分かった。(33-42頁)(10頁)(査読有り)

<p>(報告書・会報等)</p> <p>1. 生活構造</p>	<p>単著</p>	<p>2001年3月</p>	<p>1999年度～2000年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書「現代日本における生活構想の展開に関する社会学的分析」、武蔵大学社会学部</p>	<p>東京で中高年を対象に行った武蔵大学ライフスタイル研究会の調査票調査の生活時間、行事、メディア関連の質問から、中高年の生活経験について、数量データの分析をまとめた。中高年の生活構造には、40代・50代のまとまりと、70代・80代のまとまり、その間の移行期としての60代のまとまりがあることが分かった。担当：第3章(29-37頁)(9頁)、研究代表者：藤村正之、執筆者：藤村正之、武田美亜、<u>二方龍紀</u>、橋本哲史、小坂啓史、小淵高志</p>
<p>2. メディアと青年</p>	<p>単著</p>	<p>2004年3月</p>	<p>2001年度～2003年度科学研究費補助金基盤研究(A)(1)研究成果報告書「都市的ライフスタイルの浸透と青年文化の変容に関する社会学的分析」、大妻女子大学人間関係学部</p>	<p>東京と神戸で青少年を対象に行った青少年研究会の調査票調査などをもとに、メディアの利用について、数量データの分析を進めた。その際、メディア利用の中でも、いわゆる「メル友」など特徴的な利用に注目した分析も行った。担当：第5章(57-70頁)(14頁)、研究代表者：高橋勇悦、執筆者：高橋勇悦、浅野智彦、南田勝也、木島由晶、小川博司、<u>二方龍紀</u>、辻泉、富田英典、福重清、加藤篤志、和泉広恵、西村美東士、石川良子、羽渕一代、岩田考、角田隆一、浜島幸司、苫米地伸、芳賀学、菊池裕生</p>
<p>3. 余暇時間・生活の豊かさ・消費行動の分析</p>	<p>単著</p>	<p>2011年3月</p>	<p>2008年度～2010年度科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)研究成果報告書「時間資源の配分と生活の質との関連をめぐる社会学的分析」、上智大学総合人間科学部</p>	<p>日本リサーチセンターの協力のもと20～59歳の既婚男女を対象に行った調査票調査の余暇時間、生活の豊かさ、消費行動関連の質問について、数量データの分析をまとめた。余暇時間の使い方は、性別、世代、就業形態との関わりが強いことが分かった。また、自身の生活の豊かさの印象については、性別や世代、家族人数、職種、世帯年収が関わっていた。担当：第I部第5章(74-89頁)(16頁)、研究代表者：藤村正之、執筆者：藤村正之、玉置祐介、石田健太郎、<u>二方龍紀</u>、劉薫根</p>
<p>4. 娯楽時間の平均と職業・世帯構成・生活意識等の関係</p>	<p>単著</p>	<p>2011年3月</p>	<p>2008年度～2010年度科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)研究成果報告書「時間資源の配分と生活の質との関連をめぐる社会学的分析」、上智大学総合人間科学部</p>	<p>家計経済研究所の「消費生活に関するパネル調査」の生活時間データの中の娯楽分野の時間について、職業、世帯構成、生活意識等の関連を分析し、まとめた。娯楽時間は、世代や仕事、家族関係、友人関係、収入などによって、大きく違うことが確認できた。また、この娯楽時間は、幸福感とも関わっていた。担当：第II部第4章(136-144頁)(9頁)、研究代表者：藤村正之、執筆者：藤村正之、玉置祐介、石田健太郎、<u>二方龍紀</u>、劉薫根</p>

5. メディアの利用状況の経年比較	単著	2015年3月	2011年度～2013年度科学研究費補助金基盤研究 (A)研究成果報告書「流動化社会における都市青年文化の経時的実証研究-世代間/世代内比較分析を通じて-」、上智大学総合人間科学部	東京と神戸で青少年を対象に行った青少年研究会の調査票調査などをもとに、メディアの利用について、数量データの分析を進めた。2002年調査と2012年調査の若年票の比較分析を行った。担当：第2章1節(25-27頁)(3頁)、研究代表者：藤村正之、執筆者：羽瀧一代、永井純一、南田勝也、溝尻真也、永田夏来、木島由晶、小川博司、 <u>二方龍紀</u> 、阪口祐介、藤田智博、河野昌広、辻大介、辻泉、加藤篤志、浅野智彦、土井隆義、西村美東士、福重清、木村絵里子、苫米地伸、久保田裕之、浅野智彦、牧野智和、岩田考、岡本祐二、寺地幹人、菊池裕生
6. 時間感覚と関わる「生活の志向性」の分析	単著	2015年3月	2011年度～2013年度科学研究費補助金基盤研究 (A)研究成果報告書「流動化社会における都市青年文化の経時的実証研究-世代間/世代内比較分析を通じて-」、上智大学総合人間科学部	東京と神戸で青少年を対象に行った青少年研究会の調査票調査などをもとに、社会意識について、数量データの分析を進めた。時間感覚と関わる「生活の志向性」の分析を行った。担当：第6章5節(83-85頁)(3頁)、研究代表者：藤村正之、執筆者：羽瀧一代、永井純一、南田勝也、溝尻真也、永田夏来、木島由晶、小川博司、 <u>二方龍紀</u> 、阪口祐介、藤田智博、河野昌広、辻大介、辻泉、加藤篤志、浅野智彦、土井隆義、西村美東士、福重清、木村絵里子、苫米地伸、久保田裕之、浅野智彦、牧野智和、岩田考、岡本祐二、寺地幹人、菊池裕生
(国内学会発表)				
1. 都市青年の意識と行動(3)メディアについて	単独	2003年10月12日	第76回日本社会学会大会 一般研究報告 I (自由報告) (1) 文化と社会意識1 (於中央大学)	東京と神戸で青少年を対象に行った青少年研究会の調査票調査などをもとに、メディアの利用について、数量データの分析を進めた。その際は、メディア相互の関係と利用者の属性との関係に注目した。
2. 携帯電話の電話帳機能と人間関係の関連——都市青年の調査を中心に——	単独	2004年11月21日	第77回日本社会学会大会 一般研究報告 I (自由報告) (3) 情報・コミュニケーション2 (於熊本大学)	東京と神戸で青少年を対象に行った青少年研究会の調査票調査及びインタビュー調査などをもとに、携帯電話の利用について分析を進めた。特に携帯電話の電話帳の登録・削除の過程に、特徴的な傾向が見られることが分かった。
3. 中高年における情報化とライフスタイル——都市における中高年調査からの考察	単独	2006年10月29日	第79回日本社会学会大会 一般研究報告 I (自由報告) (3) 情報・コミュニケーション (於立命館大学)	東京で中高年を対象に行った武蔵大学ライフスタイル研究会の調査票調査などをもとに、中高年のライフスタイルと情報化の関わりについて数量データの分析を進めた。中高年の中にも、情報化への対応をめぐって、顕著な差があり、情報化に積極的な中高年のライフスタイルには、特徴があることが分かった。

4. 大学生の生活と意識 (5) 「メディアの再帰的利用」を行うのは、どんな大学生か？	単独	2021年11月13日	第94回日本社会学会大会 一般研究報告 I (自由報告) 子ども・青年・中高年 (1) (於東京都立大学・オンライン開催)	全国19大学で大学生を対象に行った青少年研究会の調査票調査などをもとに、再帰的意識とSNS利用などの関わりについて数量データの分析を進めた。自らが行動するとき、SNS上での反応を意識する大学生の特徴を諸属性や「生活意識・行動」「メディア利用」「友人関係」「恋愛・家族意識」「自己意識」「社会意識」などの側面から分析した。
--	----	-------------	---	--

(その他) 〔コラム〕 1. 団塊世代・団塊ジュニア世代とライフスタイル	単著	2011年11月	藤村正之編『いのちとライフコースの社会学』弘文堂	「団塊世代」「団塊ジュニア世代」という2つの世代について、概念を整理し、ライフスタイルを比較したコラムを執筆した。ライフスタイルの中でも、特に、その消費文化に着目し、「生活の豊かさ」という視点から分析を行った。担当：コラム(153頁)(1頁)、編者：藤村正之、本文執筆者：檜田美雄、白井千晶、株本千鶴、皆吉淳平、久木元真吾、玉川貴子、三井さよ、嶋崎尚子、角田隆一、南田勝也、田淵六郎、藤村正之、山田陽子、野上元、岩田考、出口泰靖、坂田勝彦、岩澤美帆、柄本三代子、コラム執筆者：片瀬一男、小坂啓史、檜田美雄、石田健太郎、小林多寿子、小淵高志、二方龍紀、山本馨、朝倉景樹、翁川景子、遠藤恵子、玉置佑介、金成垣、山本敦久
--	----	----------	--------------------------	---

研 究 活 動 項 目

助成を受けた研究等の名称	代表、分担等の別	種 類	採択年度	交付・受入元	交付・受入額	概 要
(科学研究費採択) 1. 現代日本における生活構想の展開に関する社会学的分析 2. 都市的ライフスタイルの浸透と青年文化の変容に関する社会学的分析	研究協力者 研究協力者	科学研究費補助金基盤研究(C)(2)(課題番号11610211) 科学研究費補助金基盤研究(A)(1)(課題番号13301011)	1999年度～2000年度 2001年度～2003年度	武蔵大学社会学部 大妻女子大学人間関係学部		科研費研究(研究代表者：藤村正之)に研究協力者として参加した。調査票調査を行い、生活時間やメディア文化の視点から、報告書を執筆した。 科研費研究(研究代表者：高橋勇悦)に研究協力者として参加した。調査票調査を行い、メディア文化の視点から、報告書を執筆した。

3. 時間資源の配分と生活の質との関連をめぐる社会学的分析	研究協力者	科学研究費補助金基盤研究(C)(一般)(課題番号20530476)	2008年度～2010年度	上智大学総合人間科学部		科研費研究(研究代表者:藤村正之)に研究協力者として参加した。調査票調査を行い、余暇時間等を分析し、生活の豊かさの視点から報告書を執筆した。
4. 流動化社会における都市青年文化の経時的実証研究-世代間/世代内比較分析を通じて-	研究協力者	科学研究費補助金基盤研究(A)(課題番号23243065)	2011年度～2013年度	上智大学総合人間科学部		科研費研究(研究代表者:藤村正之)に研究協力者として参加した。調査票調査を行い、メディア文化やライフスタイルに関する視点から報告書を執筆した。
5. 現代若者の再帰的ライフスタイルの諸類型とその成立条件の解明	研究分担者	科学研究費補助金基盤研究(A)(一般)(課題番号19H00606)	2019年度～2023年度	東京学芸大学教育学部	273,520円(2019～2022年度)	科研費研究(研究代表者:浅野智彦)に研究分担者(メディア班班長)として参加し、研究を進めている。具体的には、研究分担者として、予備調査を実施し、結果をもとに、調査票を取りまとめ、実査(全国調査・大都市調査)を行った。現在、研究成果を取りまとめるために、データを集計し、分析を進めている。